

「近代化」のなかの ジェンダー (二) (秩序としての混沌 -- インド研究ノート 第11回)

| | |
|-----|--|
| 著者 | 湊 一樹 |
| 権利 | Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp |
| 雑誌名 | アジ研ワールド・トレンド |
| 巻 | 211 |
| ページ | 50-51 |
| 発行年 | 2013-04 |
| 出版者 | 日本貿易振興機構アジア経済研究所 |
| URL | http://hdl.handle.net/2344/00003733 |

秩序としての混沌

インド研究ノート

「近代化」のなかのジェンダー (二)

湊 一樹

●インドはそんなにひどいのか

もちろん、「先進国」と呼ばれる国々においても、女性が社会的に不利な立場に置かれていることには変わりはない。例えば、国内の政治や経済に関するニュースを思い浮かべてみればすぐにわかるように、日本の政界・官界・財界などで中心的な役割を担っているのはほとんど男性ばかりである。そして、大臣などの重要ポストへ女性が登用されたとしても、それが「サプライズ人事」とか「目玉人事」とみなされてしまうこと自体、女性の社会進出が一向に進んでいない日本の現状を何よりも如実に物語っている。また、様々な分野で女性が活躍していると考えられているアメリカでも、女性の社会進出をめぐる問題は依然として重要な議論の的なのである（例えば、参考文献①を参照）。

しかし、日本やアメリカなどと比べて、インドの女性たちが社会のなかで受けている不利益は、その性質や深刻さがまったく別次元のものであるといわざるをえない。なぜなら、それは女性の生存—さらには、そもそもこの世に生を受けられるかどうか—というあまりにも根本的な問題を孕んでいるからである。

●「性比」の国際比較

女性に対する深刻な社会的差別が存在するかどうかを測るための尺度として、男性と女性の人口比である「性比」(sex ratio)がよく用いられる。なぜこのような指標が使われるかというと、男性に比べて女性が極端に少ないアンバランスな人口分布は、女性への根強い差別や偏見が社会にあることを強く疑わせるからである（本稿では、男性一〇〇〇人当たりの女性の人口を性比と呼ぶことにする。したがって、性比の値が一〇〇よりも大きければ、男性の人口よりも女性の人口の方が多いことを意味する。ただし、男性人口と女性人口のどちらが分母または分子になるかなど、文献によって性比の定義は異なる）。

表1は、(1)

南アジア、(2) 中国・東南アジア、(3) 先進国という三つのグループごとにいくつかの国を取り上げ、それぞれについて性比と一人当たり国民総所得

表1 性比の国際比較

| | 男性1000人当たりの女性人口 | | 1人当たり国民総所得 (2010年) |
|----------|-----------------|-------|--------------------|
| | 2001年 | 2011年 | |
| 南アジア | | | |
| インド | 931 | 938 | 1,340 |
| パキスタン | 953 | 969 | 1,050 |
| バングラデシュ | 949 | 976 | 640 |
| ネパール | 1,008 | 1,016 | 490 |
| スリランカ | 1,008 | 1,028 | 2,290 |
| 中国・東南アジア | | | |
| 中国 | 931 | 927 | 4,260 |
| マレーシア | 965 | 972 | 7,900 |
| フィリピン | 984 | 977 | 2,050 |
| インドネシア | 1,000 | 1,004 | 2,580 |
| ベトナム | 1,033 | 1,024 | 1,100 |
| タイ | 1,033 | 1,037 | 4,210 |
| 先進国 | | | |
| アメリカ | 1,037 | 1,024 | 47,140 |
| イギリス | 1,049 | 1,033 | 38,540 |
| ドイツ | 1,049 | 1,041 | 43,330 |
| フランス | 1,071 | 1,053 | 42,390 |
| 日本 | 1,045 | 1,053 | 42,150 |

(出所) <http://data.worldbank.org/> のデータを基に著者作成。
 (注) 1人当たりの国民総所得は、米ドルを単位としている。

を示したものである。この表から、以下の三つの点を読み取ることができる。

第一に、日本や欧米諸国では、性比の値は一律に一〇〇〇を超えており、女性が全人口の半数以上を占めている。この背後には、生物学的な理由から女兒よりも男児の方が若干多く生まれるものの、女性は病気などに対してより強く長生きする傾向にあるため、全体的には女性の人口が男性の人口を上回るといふメカニズムが働いている（参考文献②）。

第二に、先進国以外でも性比の値が一〇〇〇を超える国がある一方で、一部の途上国では、全人口に占める女性の割合が極端に小さい。そのため、同じグループ内であっても、国によって男女比に大

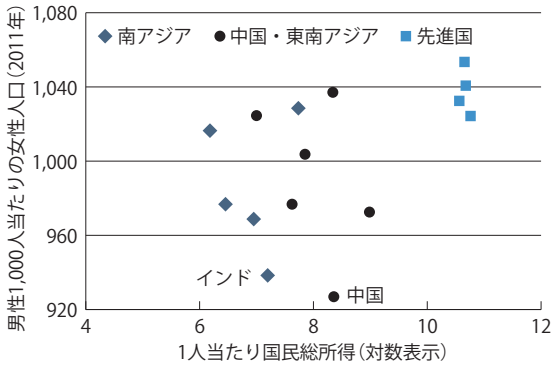
大きな違いがみられる。特に、インドと中国という二つの人口大国はともに性比が九三〇〜九四〇前後と異常に低く、その突出ぶりが際立っている。

第三に、人口に占める女性の割合と経済水準がともに高い先進国を除くと、性比と一人当たりの国民総所得の間にはつきりとした関連性は認められない。図1はこの点をより明瞭な形で表している。

●下がり続ける子供の性比

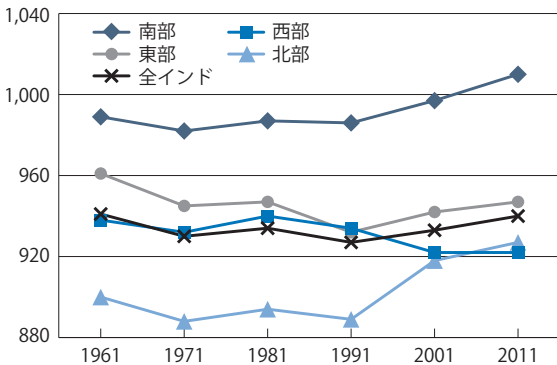
次に、インド国内の地域間で性比を比較してみることにしよう。図2は、インドの主要な州を北部・東部・西部・南部という四つのグループに分類したうえで、一九六

図1 性比と経済水準



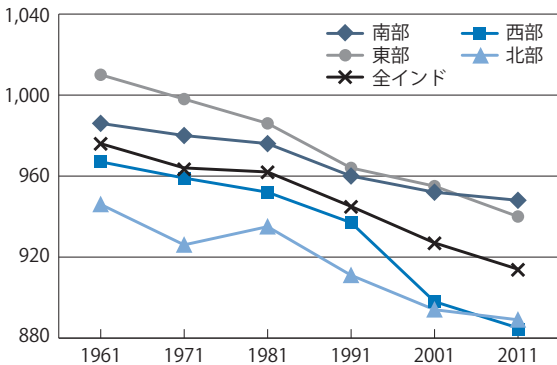
(出所) <http://data.worldbank.org/> のデータを基に著者作成。

図2 インドにおける人口全体の性比



(出所) Census of India のデータを基に著者作成。
(注) 各地域を以下の州によって構成されている。南部 (4州) : ケララ州、タミル・ナードゥ州、アーンドラ・プラデーシュ州、カルナータカ州、西部 (2州) : マハラシュトラ州、グジャラート州、東部 (4州) : 西ベンガル州、ビハール州、ジャールカンド州、オリッサ州、北部 (7州) : パンジャブ州、ハリヤナー州、ウッタル・プラデーシュ州、ウッタラカンド州、ラージャスターン州、マディヤ・プラデーシュ州、チャッティースガル州。

図3 インドにおける子供 (0~6歳) の性比



(出所) Census of India のデータを基に著者作成。
(注) 図2を参照。

というのである。とりわけ、性比が極端な「南高北低」の傾向を示していることが一目瞭然である。実際には、それぞれの地域内にもさらにばらつきがあるため、州ごとにデータをみることで、インド国内により大きな性比の隔たりのあることがわかる(さらに、一つの州のなかにも格差があることはいうまでもない)。例えば、二〇一一年のデータによると、南部のケララ州の性比は一〇八四と先進国並みの値を示している一方で、パンジャブ州とハリヤナー州という経済的に豊かな北部の二州では、性比がそれぞれ八九三と八七七と極めて低く、ケララ州との差は約二〇〇ポイントに

も及んでいる。また、過去二〇年間で(西部を除いて)全体的に男女比のアンバランスが少しずつ解消されつつあるという点も注目に値する。例えば、インド全体の性比に目を向けてみると、男性一〇〇〇人当たりの女性の人口は、一九九一年には九二七、二〇〇一年には九三三、そして、二〇一一年には九四〇と着実に改善する傾向にある。ところが、驚くべきことに、〇〜六歳の子供の性比 (child sex ratio) はまったく異なるパターンを描きながら推移している。つまり、図3ではつきりと示されているように、過去五〇年間にわたって子供の性比は大きな地域差

をともないながらも一様に低下し続けており、悪化に歯止めがかかっていないのである。

(みなど かずき/アジア経済研究所 在デリー海外派遣員)

《参考文献》

- ① Slaughter, Anne-Marie 2012. "Why Women Still Can't Have It All." *Atlantic*, July/August. (<http://www.theatlantic.com/magazine/archive/2012/07/why-women-still-cant-have-it-all/309020/>)
- ② Sen, Amartya 1990. "More than 100 Million Women Are Missing." *New York Times Review of Books*, December 20.